方々の殆どが彼を直接には知らない世代だと思うが、三木史観が編者を通じて、脈々と次世代に受け継がれていることに嬉しさと感動を覚えたことを付しておきたい。

（田村　愛理　東京国際大学商学部教授）

安田慎『イスラミック・ツーリズムの勃興――宗教の観光資源化』ナカニシヤ出版　2016年　244頁

「待望の書」というべきであろうか。大勢において、その評価を素直に首肯する気持ちに偽りはない。だが同時に、何の保留も加えることなしに、本書の主張するところを肯んじるにはいささかの躊躇を感じずにはおられないのも事実である。

本書は、若く知的な地域研究者が、イスラームと観光産業がどのように関わってきたのかを探求し、練り上げた理論的枠組みを一個の著作に結実させた書物である。2012年に京都大学から「博士（地域研究）」の学位を授与された際の提出論文を改稿して、2016年に出版された。

全10章（序章、終章と本論4部8章）からなる全体は、シーア派の人々の参詣行為が、シリアで宗教観光として組織化される過程を、イスラミック・ツーリズムが世界的な興隆をみせる過程へとつなぐ形で以下のように構成されている。

序章「イスラームとツーリズムをめぐる分断と架橋をめぐって」

第1部「イスラミック・ツーリズムにおける宗教市場――宗教の観光資源化をめぐる力学」
　第1章「イスラミック・ツーリズムにおける観光資源化――宗教観光の商品化・市場・コミットメントをめぐって」

第2部「シリア・シーア派参詣地の成立と発展」
　第2章「シリア・シーア派参詣地の形成――コミュニティの宗派資源をめぐって」
　第3章「宗派資源から政治資源へ――バアス党体制下におけるシリア・シーア派参詣地」
　第4章「ヒエラルキーからネットワーク・ガバナンスへ――シリア観光戦略のなかのシーア派参詣地」

第3部「宗教観光としてのシリア・シーア派参詣」
　第5章「産業化するシリア・シーア派参詣――イスラーム旅行会社が創り出す宗教観光産業の秩序」
　第6章「排除する空間から包摂する場へ――宗教景観における分断と共有」
　第7章「儀礼か、パフォーマンスか――シリア・シーア派参詣地における宗教実践」

第4部「イスラミック・ツーリズムの勃興――宗教の観光資源化」
　第8章「イスラームを再定式化する――宗教観光からイスラミック・ツーリズムへ」

終章「イスラミック・ツーリズム研究の新たな地平へ」

一見してわかるように、本書の中核をなすのは、ダマスクスのサイイダ・ザイナブ廟をはじめとするシリアのシーア派参詣地とそこでの参詣行為が、観光産業と関わりつつ、どのように変遷してきたのかを論ずる第2部および第3部の各3章であり、これを第1部と第4部の各1章が挟み、さらに前後に序章と終章が配されている。元となった博士論文には直接目を通していないが、公表されている論文要旨［安田2012］によれば、原論文は全11章（序章、終章と本論3部9章）からなり、構成の大幅な変更があったと推測される。

再編の過程を踏んだこともあるのか、本書は部構成、章構成とも明確な意図に基づく仕上がりでわかりやすい。

序章は目的、対象地域と時代、先行研究紹介、意義、構成と用語法を順を追って説明しつつ、イスラームとツーリズムが相反する価値付けを持っているという従来の理解に異議を申し立て、効果的な反証としてシリアにおけるシーア派参詣を取り上げるという本書の出発点を明らかにしている。

続く第1章は「イスラミック・ツーリズム」の概念について、先行研究を参照しつつ理論的な立場を表明する。その主旨は「宗教観光に見られるイスラミック・ツーリズムにおける観光資源化の動きは、宗教市場の形成を通じたコミットメントの私事化と社会化の動きとして見てとれる。この動きこそが、現代社会におけるムスリム個人やイスラーム社会を再定式化する強い原動力となっている」(p.47)という二文に集約される。

第2部の3章は、シリアにおけるシーア派参詣地に利害関係を見出すアクターが、地域のシーア派コミュニティ(第2章)から、シリア政府とシーア派法学者に移行し(第3章)、さらに多数の民間業者の参入を経て(第4章)、政府による観光行政が全体を直接に統御する方式から、「ガイドラインとライセンスを管理することによって観光産業全体の秩序を保つ、ネットワーク・ガバナンス」(p.91)に移行したと語る。地域のシーア派コミュニティがいかなる思惑をもって、より意識的に参詣慣行を対象化して取り組んでいったか(著者の表現に従うなら「宗教資源化」していったか)、政府が参詣の統御にいかなる政治的利得を見出していったか(「政治資源化」していったか)、それが多数の民間業者の参入によっていかに多元的な様相を示すようになっていったかの議論は、多角的な視点から目配りが効いており、よく整理されている。

続いて、第3部を構成する3章は、第2部で説明されたシリアのシーア派参詣地の宗教観光について、異なる角度から光を当てる試みとなっている。イスラーム旅行会社の果たした役割(第5章)、参詣地における宗教景観の変遷(第6章)、同じく参詣地における宗教実践のありよう(第7章)が取り上げられ、いずれもが、参詣に対する人々の関わりようが次第に多様になっていきながら(コミットメントの私事化)、やがてはそうした関わりに、人々が社会的承認を求める結果として再帰的な価値付けがなされ、多彩ではあっても共同性と競争性を有する状態(コミットメントの社会化)にいたったという解釈に収斂する。イスラーム旅行会社の類型分けや、参詣を不正な権力に抵抗する行為に重ね合わせる「カルバラー史観」とその超克の過程、参詣地での宗教実践が有する儀礼とパフォーマンスの両面性といった指摘は、それぞれに興味深い考察を読者に促してくれる。

第4部である第8章は、宗教観光から一歩進めて、宗教観光をその一部に含む「イスラミック・ツーリズム」の興隆を論じる。イスラミック・ツーリズムをオルタナティブ・ツーリズムの一種と位置づけた上で(第2節第1項と第2項が同一題であることはご愛敬)、その方向性をめぐる中東起源の理念派と東南アジア起源の市場派のせめぎ合いから、それらを統合して成立したシャリーア・コンプライアンス概念とこれを測る格付けという手法の発達へと議論は進められる。最終的には、第1章に呼応して、コミットメントの私事化と社会化を通じて形成された宗教的価値と観光的価値の両立が、宗教観光を先駆としてイスラミック・ツーリズムの興隆を招き、それが「イスラームの再定式化」をもたらしたという本書全体の枠組みが再提示される。

短い終章は、第1部から第4部までの内容の素直な要約の色合いが濃いが、最終節の手前で「シリア騒乱と宗教観光市場の衰退」と題された第4節を置かざるをえず、それは、今後の事例研究の継続的発展が困難となったという意味では残念なことだが、本書がシリアのシーア派参詣地の事例研究として有する貴重さを際立たせるものとも受け止められる。

事例研究として貴重であるだけでなく、本書は、イスラームとツーリズムの関係を正面から取り上げた研究として、とりわけ日本語の著作では「嚆矢」といってよい先駆性を有している。10年ほど前から現代イスラームの研究についてツーリズムに注目することの重要性を提唱してきた評者[赤堀 2004: 246]が、冒頭で「待望」と述べた所以もそこにある。

だが、先駆的であるがゆえ、その議論には必ずしも説得的ではないと思われる点もいくつかある。

たとえば、「コミットメントの私事化と社会化」による「イスラームの再定式化」といった理論的枠組みの一貫性とうらはらに、それらの用語が何度も繰り返されるあまり、様々に紹介される事例はともすると理論を支えるための添え物と目に映り、概念もまた空疎なマジックワードと化してしまいかねない。事例と理論がせめぎ合うダイナミズムのなかで、自ら打ち出した概念に疑いの目を持って対するような姿勢からの記述があれば、なお望ましかったろう。

それと関連して、宗教観光とイスラミック・ツーリズムの進展の筋道を本書はあまりにも円滑な流れとして提示しているという疑念も捨て去ることができない。著者自身も「カルバラー史観をめぐる分断と対立」(pp. 123–124) や、イスラミック・ツーリズムに関する理念派と市場派の対抗といった対立的局面を取り上げているが、それらがいずれも最終的には調和してしまうという論の運びは、予定調和的にすぎる。

その結果、「コミットメントの私事化と社会化」が参詣する個々人にとって具体的にはどのような体験であるのか、またそもそも、「再定式化」されたイスラームとはどのようなイスラームなのかについて、著者になお多くの記述を求めたいと思わずにはおられない。シリア騒乱による宗教観光の衰退をめぐって、著者自身がはからずも「聖地防衛へ参画することで、自らのシーア派としてのコミットメントを確認していく動き」(p. 182) に触れるとき、そこには容易に揺れ動き、いまだ定まらぬ現代のイスラームの形をみることができるように評者には思われる。調和的に展開する部分に過度に注目するのではなく、近代の状況に即して「再定式化」が欲されながら、定式化に至らぬ状況をも見て取られるべきではなかったろうか。

同様のことは宗教観光とイスラミック・ツーリズムの関係についてもいえる。前者は本当に後者を導く先駆なのだろうか。著者はヘンダーソンの論考を引用して、イスラミック・ツーリズムとは「主にムスリムによって行われるムスリム世界内のツーリズム現象」であり、「宗教的目的に限らないあらゆる目的を含んだ、ムスリムを対象としたすべての商品やマーケティング」であると述べるが (p. 169)、この二つの定義の間にかなりの違いがあるのは明らかだし、また宗教観光との間にも落差がある。イスラミック・ツーリズムがはたしてオルタナティブ・ツーリズムの一環であるかも、インドネシアなどで私が見聞きした宗教観光が、少なくとも形態的には伝統的ともいえる大衆観光の形を取っていることを思うと反論の余地がある。さらにいえば、観光産業が近代に成立する産業の一形態であることは事実であっても、同時に前近代におけるその祖型は聖地巡礼であり、宗教観光がいわばそうした祖型の再生であることまでも考慮に入れれば、著者の議論はより論争的で葛藤をはらんだ現象を視野に入れて論じられるべきであろう。

だが、著者のいうとおり、「イスラミック・ツーリズムは現状においても、研究においてもまだ端緒についたばかり」である (p. 183)。さらなる論争の高まりをこそ、この分野の研究は必要としており、その先導としての役割を本書は充分に果たすだろう。

＜参照文献＞

赤堀雅幸 2004 「イスラームの聖者と聖者のイスラーム――民衆信仰論の一環として」『宗教研究』78(2), pp. 229–250.

安田慎 2012 「現代イスラームにおける宗教ツーリズム――シリア・シーア派参詣を中心に（Abstract_要旨）」<http://hdl.handle.net/2433/157867>.

（赤堀　雅幸　上智大学総合グローバル学部教授）

鎌田繁『イスラームの深層――「遍在する神」とは何か』（NHKブックス 1233）NHK出版　2015年　285頁

本書は多年にわたり日本のイスラーム思想研究を、ことに神秘思想、神秘哲学、シーア派研究の分野でリードしている、国際的にも著名な研究者が世に問うたイスラームとその思想への入門書である。この書評では（文字数の問題もあり）本書の内容をまんべんなく紹介はせずに、まず本書全体の性格と概要を記し、次いで記述方法に見られる特徴と共に内容の一部を紹介する。さらに評者の所感を述べて結びとしたい[1)]。

まず入門書と述べたが、読者がイスラームの信仰と実践、思想、歴史や分派などの諸相を網羅した一般的な概説書、概論書を期待すれば、本書の構成と内容はそこからはある意味で外れていると思われよう。本書は前半ではイスラームの誕生から信徒が何を信仰し、何を実践するかという基本を扱うが、後半では神秘思想と神秘哲学に叙述をほぼ集中しているからである。

1）この書評では内容紹介の際、繁雑さを避けるため本文中で該当ページは記さず、どの章にあるかのみ記す。また思想家の生歿年は本書に合わせて西暦のみ記す。